



敷に料理を並べ、新年を祝う。毎年、同じ食器、同じような料理、繰り返し似た様で異なるその年の風景。その中に、キミ子や姉が作ったしめ縄を取り入れてみる。繰り返し返される正月の風景となるように。キミ子の亡くなった兄で、ヨシエ(中尾)の祖父マサミチも器用な人だった。マサミチが北陸の旅館に泊まった時に、臺で作られた宝船が飾られているのを見て、真似をして作るようになった。マサミチの作る宝船は「出船」として縁起がよいと、言っていたそうだ。「出船」とは、いつでも出港できるように船先を港の外に向けた状態をいうそうだ。宝船はマサミチしか作れなかったので、亡くなって技術が途絶え二〇年以上経つ。今回、しめ縄について調べるうす、マサミチが作った宝船がマサミチの長男の嫁の実家で見つかった。

後期展示より追加された映像は、二〇一九年の元旦の中尾家の食卓の風景。

## ⑧ 《キミ子からヨシエへ》

映像

二〇一八

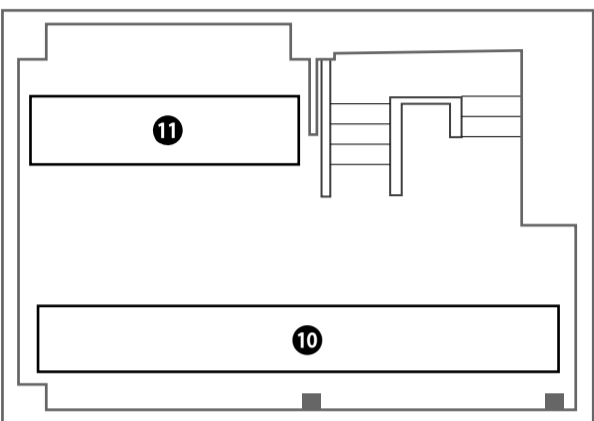
ヨシエ(中尾)が、キミ子のしめ縄の作り方を記録しておくために撮影した。作り方を習いながら、世間話や家族、昔飼っていた猫の話まで、とりとめのない話をたくさんした。労働の最中に手を動かしながら話すことは、かつてキミ子が、姉や親せきと一緒にしめ縄を作っていた時間と似たものだったろうと想像した。兄妹たちが亡くなり、現在、キミ子はひとりしめ縄を作っている。

## ⑨ 《キミ子の作業場》

カラープリント(六切ワイド)

二〇一八

【四階展示室】



## ⑩ 《美佐子切》

卷子(紙本着色)、桐箱

二〇一五

【裏書】

美佐子(昭和四年生 同六十二年没)

旧南河内郡三都村の農家、父興平イ十郎

と母キヨエの長女。

昭和二十五年、旧南河内郡平尾村の農家、中尾正一と結婚。

本図は嫁入り道具の桐箆笥に遺された物を描き記す。

桐箆笥は富田林市若松町に現存する錦タンス店製。

平成二十七年七月吉日

孫中尾美園

意味を持つ。尚、本作品は二〇一五年にギャラリー・パルクで開催した中尾美園の個展『図譜』に出品されていたものを巻子に仕立てたもの。

## ⑪ 《久代切》

卷子(紙本着色)、桐箱

二〇一八

【裏書】

Hisayo (1923-2014) was born in Ooe-cho, which is to the north of Kyoto city. Her family used a Daihachigunuma (a large hand-drawn cart) for moving to Iwakura in her girlhood. She was married to a man from her hometown. After that, they gave birth to a son and two daughters. They ran a boarding-house for students on their property. She had been in good health enough to do farming until her death. Hisayo's national flags are drawn in this picture. Her son says that she displayed the national flag on national holidays since long ago.

久代(一九三・二〇一四)は、京都の北側にある大江町で生まれた。娘時代に両親と共に家財道具をのせた大八車を引いて、岩倉へ移り住んだ。同郷出身の男性と結婚し、(婿に取り)、一男一女をもうける。自宅の敷地内で、学生のための下宿を営んでいた。亡くなる直前まで、畑仕事もこなすほど、元気であった。本図の国旗セットは、久代が所蔵していたものである。長男によれば、ずっと昔から祝日には掲揚していたとされている。

《美佐子切》の制作を経て、奈良県明日香村で「桐箆笥」をリサーチするなかで、神社で挙式した折に拝受した国旗を大事にしている女性に出会い、普通の生活の中で「身近」にある国旗に興味を覚えた。久代は中尾の友人の嫁ぎ先の義祖母で、生前は祝日の度に自宅の玄関に国旗を掲揚する習慣があったそうだ。久代が亡くなり、家を解体する時に複数の国旗セットの一部が見つかった。亡くなった後、家族は国旗を掲揚する習慣は続けていない。

意味を持つ。尚、本作品は二〇一五年にギャラリー・パルクで開催した中尾美園の個展『図譜』に出品されていたものを巻子に仕立てたもの。

作家略歴

中尾 美園(なかお みえん)

二〇〇六 京都市立芸術大学大学院美術研究科保存修復専攻修了

【おもな展覧会】

二〇〇六 京都市立芸術大学大学院修了制作展「大学院市長賞」(京都市美術館)

二〇〇八 京展「館長奨励賞」須田賞・芝田記念賞(京都市美術館)

二〇一三 個展「いなかの庭」(KUNST ARZT 京都)

： シェル美術賞(入選)(国立新美術館)

二〇一五 アーティスト・イン・レジデンス「飛鳥アートヴァレージ」(二〇一五年)「国営飛鳥歴史公園 奈良」

： 個展「図譜」(Gallery PARC 京都)

二〇一六 飛鳥アートヴァレージ(2015)「明日香の匠展」(県立万葉文化館 奈良)

： Assemblage NAGOYA 2016 現代美術展「パノラマ庭園」動的生態系(こしや)「ポタンギャラリー 愛知」

： 個展「Coming Ages」(Ns ART PROJECT 大阪)

二〇一八 個展「紅白のハギレ」(ギャラリー一揺 京都)

： 個展「あすの不在に備えて」(元崇仁小学校 京都)

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

： 小学校 京都

text

二〇〇六年に京都市立芸術大学大学院美術研究科保存修復専攻修了した中尾美園(なかお・みえん/大阪生まれ)は、仏画や水墨画の絵師としての活動とともに、日本画における写生・模写の技術をベースとした作品により、二〇〇八年の「京展」や二〇一三年の「シェル美術賞」入選、二〇一五年の公募企画「Gallery PARC Art Competition 2015」の「ラン」採択による展覧会『図譜』の開催をはじめ、「飛鳥アートヴァレージ」(二〇一五年)や「Assemblage NAGOYA 2016 現代美術展」パノラマ庭園「動的生態系」による「二〇一六年」などへの参加、二〇一八年には「紅白のハギレ」(ギャラリー一揺/京都)、「あすの不在に備えて」(元崇仁小学校/京都)の個展を開催するなど、精力的に活動しています。

中尾は日本画における写生・臨画(模写)を「うつし」残す「記録」の側面で見え、「絵」をより長い時間を超えて未来に残る可能性を有した柔軟で強度を備えた媒体・行為であるとして、その視点をこれまで様々な作品へと展開させています。自宅近くの水路に流れてくる落ち葉、祖母の嫁入り箆笥に残された小物や着物の柄、今は空き家となった家屋や閉店した喫茶店に残る品々など、これまでに中尾は、日々の中で消失していく「モノ」をめぐる、聴き取りや調査などのリサーチを行ないながら、丹念な写生・模写によってそれらを「うつし」、絵巻に仕立てています。それは「モノ」だけでなく、「記憶」や「歴史」の「記録」であり、「絵」はそれらを「うつす」ための優れた方法であることを示しています。紙や布に描かれた「絵」は、そこに広げただけで誰もがアクセス可能な情報であり、現在のデジタルデータのように機器に依存しない独立した媒体であるといえます。とりわけ日本画は和紙や絵具、道具や技法にいたるまで、保存・補修の技術体系が確立したものであるといえ、長い時間を超えて現在に残る作品の数々が、それを実証しているといえます。

本展はこれまで同様に「うつし」による作品によって構成されます。しかし、ここでは「うつす、うつる」はオリジナルに対する複写(コピー)の関係のみを指すのではなく、そこに生じた「うつし」が「うつす、うつる」と転じていく中で、やがて新たな「生」の系譜を現していくのかを見つめるものです。

本展は中尾が、高齢となった大祖母の「生」の一部をうつしとろうとする個人的な動機に端を発したものとされます。そして、その手掛かりとして「しめ縄」をひとつの定点としています。日本の神道との関係が深く、その歴史も古いしめ縄を、一人の女性キミ(中尾の大祖母)の人生の中の生業として見つめ、彼女の手がけるしめ縄を「うつす(記録)」ことに主眼を置いています。

好奇心から見よう見まねではじめたキミ子のしめ縄作りは、七〇年以上の時間を経て独自の改良や造形美を持つに至りました。しかし、正月飾りやしめ縄の多くは一月半ばにはほとんど焼ききり納められるのが一般的であり、一年の限られた時期に作られ・飾られるものであることから、その記録は残っていません。二階展示作品にある白描によるしめ縄の絵は、現在において直ちに有意義な記録であるとは言えないかもしれせん。しかし、それがこれから先の長い時間を超えて残った時、この記録の意義は今とは異なるものになっているかもしれません。

記録し、残すことは、現在から過去を眼差すだけでなく、現在から未来に向けて「はじめる」ことでもあると言えます。中尾はその「托す」のために出来ることとして、今に見過ごされがちなもの・ことに目を向け、うつし描きます。また本展で中尾は「しめ縄づくり」の技術の「うつし(伝達)」にも取り組めます。これにより「うつし」が過去の記録や記憶だけではなく、現在と未来への生への可能性を持つことに触れています。

絵が、記憶が、技術が『うつす、うつる』ということ。またそれが点と点の関係を越えて、広く永く・遠くに「うつす、うつる」と連続していくこと。中尾の描いた「絵」には、過去だけでなく、未来をも見る(想像すること)ができるのではないのでしょうか。

正木裕介(ギャラリー・パルク)